

# 特集 ■ 徳島地方の元気な企業見学記

## 河野メリクロン、富士インパルス、ビッグウィル、阿波製紙見学記

ATACでは毎年優れた技術や製品を持つ企業を訪問して見聞を広め、コンサルティング活動に役立てていますが、昨年（2010年）12月8～9日には徳島地方の4つの企業を訪問しました。

### 株式会社河野メリクロン

美馬市にある、1977年に創設された洋ラン栽培の企業です。

フランスで発見された無菌状態でのクローン技術を河野通郎社長が1964年にシンビジウムに応用し、以来500種以上の新種の登録を行い、洋ランに関しては世界最大級の評価を得ています。

胚芽の状態から店頭に並ぶまでには10年もの歳月をかけて栽培しなければならぬが、ここで生み出された「あんみつ姫」や「マリーローランサン」など多数の品種をショールーム兼直売所の「あんみつ館」で拝見し、シンビジウムに対する認識を改めました。

河野社長の『「よく似た」は親を超えられない』という含蓄のある言葉が印象に残りました。とにかくランに対して並々ならぬ愛情を注いでいることをひしひしと感ずることができ、その仕事をどこまで好きになるかということが大事だということを感じました。

### 富士インパルス株式会社 三好工場

豊中市に本社がある、樹脂フィルム製の袋をシールするインパルスシーラーのトップメーカーで、徳島県の山間部の三好郡東みよし町に誘致企業と



して進出し、20年目を迎えています。

細田和代工場長以下28名で、300種類もの製品を製造し、売上高は富士インパルス全社の50%を占めています。

工場長の案内で製造現場を見学しました。小型のお茶袋をシールするハンディーシーラー、袋内を真空排気してシールする真空包装機、黄卵液を充填して封じるシーラー、医療用滅菌シール機など各種シーラーや賞味期限を袋に印字する卓上型印字器などの組み立て工程や、印字をつくる切削機の作業を見ることができました。

工場内は隅々まで整理整頓が行き届き、「しつけ」を含めて5Sが徹底して実践されていることを感じました。

仕事と同時に妻、母として立派に三役を果たされている、地元出身の細田工場長の自信のほどが伺われました。

### 株式会社ビッグウィル

当社は大阪市で20年以上製造研究をしていた企業から技術を引継ぎ、2007年に同じく東みよし町に設立された従業員15名、生産能力2万m<sup>2</sup>/月の天然木の極薄ツキ板シートを製造販売している企業です。

三原恵二郎取締役の案内で製造設備と製品を見

学しました。

丸太から削りだした0.2mm厚さの木目が鮮やかな極薄板の帯を継いで長くし、裏打ちしてまげても折れないように加工します。天然木を



使用しているのも同じ柄のものではなく、印刷物やビニール製では感じることはできない天然木特有の香りや感触が特徴です。

このような特徴を生かして、表面の木目が珍しい「樹の紙」から、熨斗袋、はがき、ブックカバー、短冊等の小物文具やハンドバッグなどの商品群が開発販売されています。また、裏面に特殊な裏打ちをした不燃性のシート「恋樹百景」は、壁、天井、テーブル、ソファなどのインテリアに使われます。最近では0.1mm厚さのシートの開発にも成功し、ドレスにデザインされて注目を浴びました。

吉野川流域の有数の森林地区に立地して、若者への雇用の創出と間伐材の新利用法を目指している、地域に根差した企業だと感じました。

### 阿波製紙株式会社 阿南工場

阿波製紙は大正の初めに、阿波の名産品であった藍染で財をなした豪商などが出資し、地元産の楮(コウゾ)・三桎(ミツマタ)を使って和紙を作り出したのが始まりです。



やがて、昭和34年ごろから主力を特殊機能紙の製造に移し、自動車・家電などで使用される各種フィルター、海水淡水化や薬液の濃縮・分離などに使用される逆浸透膜支持体紙など、機能紙、不織布の分野でナンバーワン企業にまで成長するに至りました。

徳島の南方に位置する阿南工場を訪れ、濱義紹取締役常務執行役員らの案内で同社の最新鋭の抄紙工場を見学しました。紙の原料である合成繊維が配合された液を濾過して紙に抄き、圧縮・乾燥して2.4mもの幅のあるロールに巻き取るプロセスは圧巻でした。

古くは和紙を作っていたこの土地で、合成繊維を抄いて機能紙を作り、世界に貢献するなど、当時の人々が想像し得ただろうかと感慨深いものがありました。

旅の途中では、祖谷渓谷に懸かる「かずら橋」をへっぴり腰で渡ったり、美馬市脇町の「うだつのある町」では藍商の旧家を見物したりと、企業見学以外にも徳島地方の自然や歴史にも触れ合えた有益な2日間でした。

（白石、多根井、長田、池田(雅)記）